

毎日歌壇

水原 紫苑 選

たましいはたくさんあっていいけれどひとつのからだ鞆(たもと)を漕ぐ 平塚市 芝澤 樹

＜評＞唯一無二のものは身体であるという、存在の感覚がプランコを揺らす。揺れながら決して宙に放たれることはない。

書けばわたしより重くなるたましいに亡霊になる才能がある 花巻市 永汐 れい

＜評＞たましいは言葉によって重くなる。言葉から逃れたたましいが亡霊となるのか。

透明なポットに茶葉はゆらめけり運命論をかきまぜるごと 埼玉 玖嶋さくら

アパートの廊下を通り抜けるとき幽霊が焼けるような匂い 三鷹市 菅原 海春

真夜中のキッチンそれは沈黙で満たされていて地球は回る 尼崎市 入間しゆか

幽フランシは一本だけじゃまっすぐに立てないことを知っているのだ 札幌市 橋 晃弘

夢で降る初雪食べたわたくしの身体は冷凍庫で眠る 横浜市 砂月 七

ドラゴンの臉を歩く夢を見てそれでも夢と気づかなかつた 柏市 遠野 鈴

花袋押し流す川それでなぜそれがわたしのためなんですか 横浜市 永永 キヌ

装丁の綺麗な異国の古本を売りたいほどの春の市 富士野市 雨雨雨汰

伊藤 一彦 選

人の世の十二単衣を脱いでゆくミステリーこそ源氏物語 宝塚市 藤田 晋一

＜評＞源氏物語論がいま盛んだ。「人の世の十二単衣を脱いでゆくミステリー」と作者。修羅の世界を裸にする紫式部の筆。

本心に心がやぶれそうなの日記は雪野 足跡もなく 東京 石川 真琴

＜評＞雪野とは何も書かれてなくて真っ白。普通なら書けば救われるが出来ないのだ。

春告げるランナーに声届くと梅が力をしほりおりたり 垂水市 岩元 秀人

いままさに鱈船出す頃合ひと老練漁師沖の潮読む 霧島市 内村としお

活けられし桃の枝にも虫の這ひ雪降る里に啓塾(きじゆ)近し 北広島市 富丘 治生

淡々と細雨が濡らす梅と月今は黙に恋してもいい 東京 藤沢 静二

闘いに敗れたトナカイの角売って餌代稼ぐ牧場 札幌市 佐藤 学

薄マニキュア誰にも気付かれないままに用筆(もちづか)握る冬の夕焼け 彦根市 飯島 白雪

日の光浴びた毛を撫で幸せは温かいものだ気づかざる 川崎市 水 面

万博のトイレは億田(ひゃくまん)だけど能登(のり)ではいまだ仮設の便所 西海市 まえだいき

米川千嘉子 選

必死に逃げて必死に探して もう簡単に「必死」は使えない 見附市 岡村 文字

＜評＞新潟県在住の作者が詠んだ場面は能登半島地震で被災した人々の様子だろうか。戦争や紛争の続く世界各地でもまた。

集団と儀式嫌いのおれが明日新婦の父になるプレッシャー 春日部市 宮代 康志

＜評＞「集団と儀式嫌い」は結構多いけれど、花嫁の父の本音を隠したのかも。

エンジンを温めながら化粧する友を照らせよ明けの金星 東京 室伏 圭子

これまでの生業(なりご)は聞いたりしない齡(とし)さままな人に交じれる 宇治市 清原 茂樹

裏側のチリの大火が映ったカヒル群の底から真つ赤な朝焼け 東京 河野多香子

満州は迎春花の咲く頃か内地見ずして逝きし児(こ)よぎる 枚方市 衛藤 聰一

小咄(こはな)のひとつのようになんかききと祝辞を述べ校長先生 千葉市 芍 薬

亡き妻の形見の杖を手にすれば「小さな旅に出よう」といふ声 高松市 島田 章平

迷わずに優先席に座る君の三つの病誰にも見えぬ 野田市 片倉 伸明

本心に齋(い)でいいのお祝いは食べられないよと念を押す君 飯田市 尾関百合子

加藤 治郎 選

心臓のように四つの部屋を持つお昼のお弁当箱の黒 碧南市 江原 冬莉

＜評＞結句の黒からだろうか。何か陰鬱な気分が感じられる。弁当箱から心臓へイメージの転換が激しい。心に迫る作品だ。

この街に寂しい人がいるようだココアがいつも売り切れている 堺市 初夏みどり

＜評＞寂しい人はココアを飲む。そんな気もする。温かく甘いものに癒やされるのだ。

庭のない我が家のベランダに咲いた植えた覚えのないメヌエツト 横浜市 友常 甘酢

白りボンするりとほとくようにしてきみは腕(うで)をそっとはずした 埼玉 玖嶋さくら

前髪の雪をほらえは君の瞳に君の故郷の海を見たこと 宮古島市 塩見 伴

牛リキシャ(ゴミ)神言葉(交差する) インド、パザル(カオス)へ生き抜く 東京 稲山 博司

わたしといっせろをいつかは知るでしょう一冬(ふゆ)ごとに歳を重ねて 京都市 小川 ゆか

作業員Aの役目をやり終えて来週からは作業員B 東京 仲原 佳

終着の近づき車内に声戻る四時間半の鈍行の旅 瑞穂市 渡部 芳郎

八十一歳のさくら今から楽しみで如月の枝今日も見上げる 横浜市 中村 秀夫

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要) 毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句

は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や、同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁で

す。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開し、本社が作成または許諾した出版物やメディアに掲載することがあります。